View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Okayama University Scientific Achievement Repository

大学教育研究紀要 第 10 号（2014）135-150

浄土真宗各派「正信念仏偈」の e-ラーニング教材

遠山 和大（岡山大学 教育開発センター）

深見 友紀子（京都女子大学 発達教育学部）

赤羽 美希（東京音楽大学 音楽教育専攻）

Development of "Shoshin Nembtsuge" e-Learning material

Kazuhiro TOYAMA (Center for Faculty Development, Okayama University)

Yukiko FUKAMI (Faculty of Human Development and Education, Kyoto Women's University)

Miki AKAHANE (Music Education, Tokyo College of Music)

要旨

浄土真宗各派の日常的な勤行（ごんぎょう）において用いられる「正信偈」の旋律を収集・採譜し、web 上にデータベース化した。採譜にあたっては、主に西洋音楽で広く用いられ、最も一般的な記譜法である五線譜を用い、初学者が容易に理解できるような記譜を工夫するとともに、口伝によって伝承されてきた旋律を、可能な限り忠実に再現できるように配慮した。その結果、これまでほとんど知られてこなかった各派「正信偈」の旋律を、広く一般に共有することが可能となり、将来的には、「正信偈」に関心をもつ学習者が e-ラーニングの教材として利用できるようになった。

キーワード：浄土真宗・仏教声明・正信偈・e-ラーニング

I. はじめに

浄土真宗（真宗）各派[1]の寺院および門徒[2]の間で、最も一般的かつ日常的に用いられている偈文（げもん）[3]として、「正信念仏偈（しょうしんねんぶつげ）」を挙げることができよう。「正信偈（しょうしんげ）」という通称（以下、この通称を用いる）で呼ばれるこの「お経」[4]は、鎌倉時代の日本の僧で、浄土真宗の宗祖である親鸞（1173-1262）によって著された。

一般的に、読経を行う際には旋律を付けずに、いわゆる「棒読みで唱える」というイメージがあるが、この「正信偈」は、旋律を読誦（どくじゅ）するという一つの特色を持っており、仏教音楽の一種である声明（しょうみょう）であるとい

えよう。この旋律は、各派ごとに異なるものが用いられており、親鸞の著した偈文(テキスト)は同一であっても、読誦される際に用いられる旋律は、派によって大きく異なる。この差異は、各派のもつ歴史的な背景などに起因するものと考えられる。

このように各派の「正信偈」の旋律に差異があること自体は、各派の僧侶や門徒の間でも広く知られてきたが、自身が所属する派以外で用いられている旋律がどのようなものであるのか、たとえ関心があったとしても、それを具体的に知る機会は多くないようである。本願寺派・大谷派といった大規模な派の場合、その派が定めた旋律による「正信偈」を録音した CD などが市販されたりしているものの、それら以外の派の場合は特に、一般的にアクセスできる資料中に「正信偈」の旋律が示された例は皆無であろう。学術的な研究の側面においても、「正信偈」のテキストに関する研究は数多く行われているが[5]、各派の旋律を比較する研究は、筆者らの知る限りにおいて、これまで行われておらず、ましてや、「正信偈」の旋律のデータベース化も行われていない。

こうした状況を鑑み、本研究では以下の作業を行った。

1. 各派における「正信偈」の旋律を収集する。
2. 収集した旋律を、現在最も一般的に用いられている記譜法である五線譜上に採譜する。
3. 各派「正信偈」の楽譜・音声、および解説等をデータベース化して web 上に公開する。

以上を通じて得られた結果から、各派ごとの旋律の差異が明らかになるだけでなく、作成されるデータベースは、e-ラーニングの教材として、京都女子大学など浄土真宗系学校の学生や、家庭で勤行の練習を行う一般門徒、浄土真宗各派の僧侶など、「正信偈」に関心をもつ人々が活用できるようになる。

なお、本研究は 2013～2014 年度の 2 ヶ年度にわたって進める予定であり、本稿はその 1 年目(2013 年度)についての報告である。2013 年度は、真宗 10 派のうち、本願寺派・大谷派・佛光寺派(ぶっこうじは)・興正派(こうしょうは)・木辺派の 5 派の本山において調査・分析を行い、残る 5 派については 2014 年度に実施することとする。

II.「正信偈」について

「正信偈」は、7 言 120 句(840 文字)からなり、浄土真宗の教えの要点を簡潔にまとめたものである。この偈文は、親鸞の代表的な著作である『顕浄土真実教行証文類(けんじょうどしんじつきょうぎょうしょうもんるい)』(全 6 巻)[6]中の、「行巻」と通称される「顕浄土真実行文類二(けんじょうどしんじつぎょうもんるいに)」の巻末に置かれている(資料 1)。

浄土真宗では、「正信偈」は寺院や門徒一般の家庭において朝晩の勤行に用いられる。その際には「正信偈」に続いて「念仏和讃」[7]「回向」[8]の順に読誦されることが一般的であるが、これらはいずれも独特な旋律を伴って読誦される。

資料 1 「正信念仏偈(正信偈)」のテキスト全文(840 文字)。[9]

正信念仏偈

帰命無量寿如来　南無不可思議光
法蔵菩薩因位時　在世自在王仏所
覩見諸仏浄土因　国土人天之善悪
建立無上殊勝願　超発希有大弘誓
五劫思惟之摂受　重誓名声聞十方
普放無量無辺光　無礙無対光炎王
清浄歓喜智慧光　不断難思無称光
超日月光照塵刹　一切群生蒙光照
本願名号正定業　至心信楽願為因
成等覚証大涅槃　必至滅度願成就
如来所以興出世　唯説弥陀本願海
五濁悪時群生海　応信如来如実言
能発一念喜愛心　不断煩悩得涅槃
凡聖逆謗斉回入　如衆水入海一味
摂取心光常照護　已能雖破無明闇
貪愛瞋憎之雲霧　常覆真実信心天
譬如日光覆雲霧　雲霧之下明無闇
獲信見敬大慶喜　即横超截五悪趣
一切善悪凡夫人　聞信如来弘誓願
仏言広大勝解者　是人名分陀利華
弥陀仏本願念仏　邪見驕慢悪衆生
信楽受持甚以難　難中之難無過斯
印度西天之論家　中夏日域之高僧
顕大聖興世正意　明如来本誓応機
釈迦如来楞伽山　為衆告命南天竺
龍樹大士出於世　悉能摧破有無見
宣説大乗無上法　証歓喜地生安楽
顕示難行陸路苦　信楽易行水道楽
憶念弥陀仏本願　自然即時入必定
唯能常称如来号　応報大悲弘誓恩

天親菩薩造論説　帰命無礙光如来
依修多羅顕真実　光闡横超大誓願
広由本願力回向　為度群生彰一心
帰入功徳大宝海　必獲入大会衆数
得至蓮華蔵世界　即証真如法性身
遊煩悩林現神通　入生死園示応化
本師曇鸞梁天子　常向鸞処菩薩礼
三蔵流支授浄教　焚焼仙経帰楽邦
天親菩薩論註解　報土因果顕誓願
往還回向由他力　正定之因唯信心
惑染凡夫信心発　証知生死即涅槃
必至無量光明土　諸有衆生皆普化
道綽決聖道難証　唯明浄土可通入
万善自力貶勤修　円満徳号勧専称
三不三信誨慇懃　像末法滅同悲引
一生造悪値弘誓　至安養界証妙果
善導独明仏正意　矜哀定散与逆悪
光明名号顕因縁　開入本願大智海
行者正受金剛心　慶喜一念相応後
与韋提等獲三忍　即証法性之常楽
源信広開一代教　偏帰安養勧一切
専雑執心判浅深　報化二土正弁立
極重悪人唯称仏　我亦在彼摂取中
煩悩障眼雖不見　大悲無倦常照我
本師源空明仏教　憐愍善悪凡夫人
真宗教証興片州　選択本願弘悪世
還来生死輪転家　決以疑情為所止
速入寂静無為楽　必以信心為能入
弘経大士宗師等　拯済無辺極濁悪
道俗時衆共同心　唯可信斯高僧説

前に述べたように、各派で用いられている「正信偈」のテキストは同一のものであるが[10]、そこに付された旋律は各派ごとに異なる。そして、一つの派の中でも、複数の旋律が定められている場合が多い。歴史的には、勤行を行う場面(法要)にあわせて数多くの旋律が存在していたようだが、時代とともに整理され、現代では各派 3～10 種類程度の旋律が定められ、勤行を行う場面によって使い分けがなされている。例えば、本願寺派を例に挙げると、以下の 3 種類が定められている。

a) 真譜:本願寺における「御正忌報恩講」[11]で、1 月 16 日の晨朝勤行にのみ用いられる旋律。

b) 行譜: 比較的重要な法要の際に用いられる旋律。

c) 草譜(そうふ): 日常的に用いられる旋律。

また、木辺派の場合は以下の 4 種類が定められている。

a) 真引(しんびき): 報恩講などの重要な法要の際に用いられる旋律。

b) 中引(ちゅうびき): 日常的に用いられる旋律。

c) 舌々(ぜぜ): 棒読み。但し、部分的に伸ばす音がある。

d) 真流(しんりゅう): ゆっくりと棒読みする。

この他、大谷派では 9 種類[12]、佛光寺派・興正派はそれぞれ 4 種類[13][14]の旋律が定められている。

Ⅲ. 旋律の収集

本来ならば、前項で述べた各派の旋律全てを調査対象にできれば良いのだが、時間的な制約などから、まずは、各派で用いられている旋律のうち、寺院だけではなく門徒一般の間で日常的に最もよく使用されている旋律を、各派の担当者と相談の上 1～2 個選び、それらを収集の対象とすることにした。具体的には、以下のものである。

a) 本願寺派:「行譜」「草譜」

b) 大谷派:「草四句目下(そうしくめさげ)」

c) 佛光寺派:「行譜」

d) 興正派:「中拍子(ちゅうびょうし)」

e) 木辺派:「真引」「中引」

これらの 7 つの旋律に対応する「正信偈」の冒頭部分を資料 2 に示す。

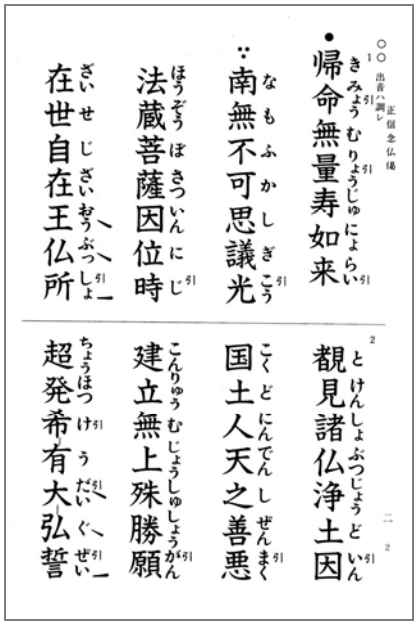
旋律の収集にあたり、当初は録音機材を各本山に持ち込み、読誦をお願いした「正信偈」の音声を収録することを予定していた。しかし、本年度に調査を行った 5 派については、各派ともこれらの「正信偈」の旋律を収録した CD を制作・販売しており、その音源をもって旋律の収集とすることができた。

こうした CD は、本願寺派・大谷派を除き、一般的にはほとんど流通しておらず、各本山において、主として門徒向けに販売されているものである。したがって、特に佛光寺派・興正派・木辺派の 3 派における「正信偈」の旋律は、これまで各派の僧侶や門徒の間以外ではほとんど知られてこなかっただけに、貴

重な資料となったといえよう。

各派の旋律についての詳述は別稿に譲ることとするが、収集された７つの旋律はいずれも、それぞれが独自の節回しを持つものであった。

資料 2　本研究で取り上げた５派の、「正信偈」の経本の冒頭部分。テキストの右側に、声明で用いられる一種の楽譜である「博士」が記入されている。

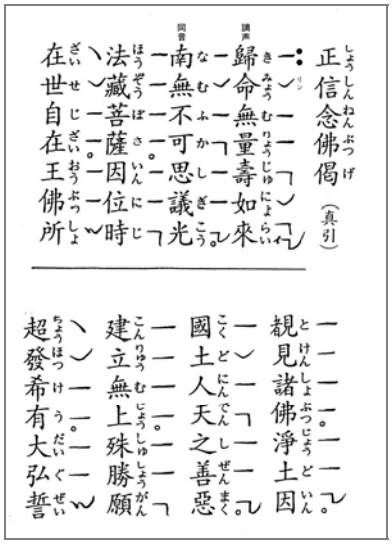


本願寺派（行譜・草譜）[15]

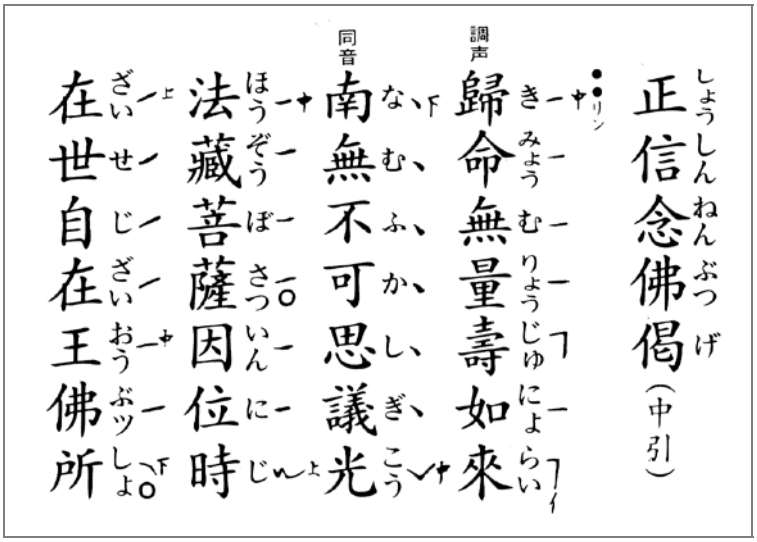
大谷派（草四句目下）[16]

佛光寺派（行譜）[17]

興正派（中拍子）[18]



木辺派(真引)[19]



木辺派(中引)[19]

Ⅳ. 旋律の楽譜化

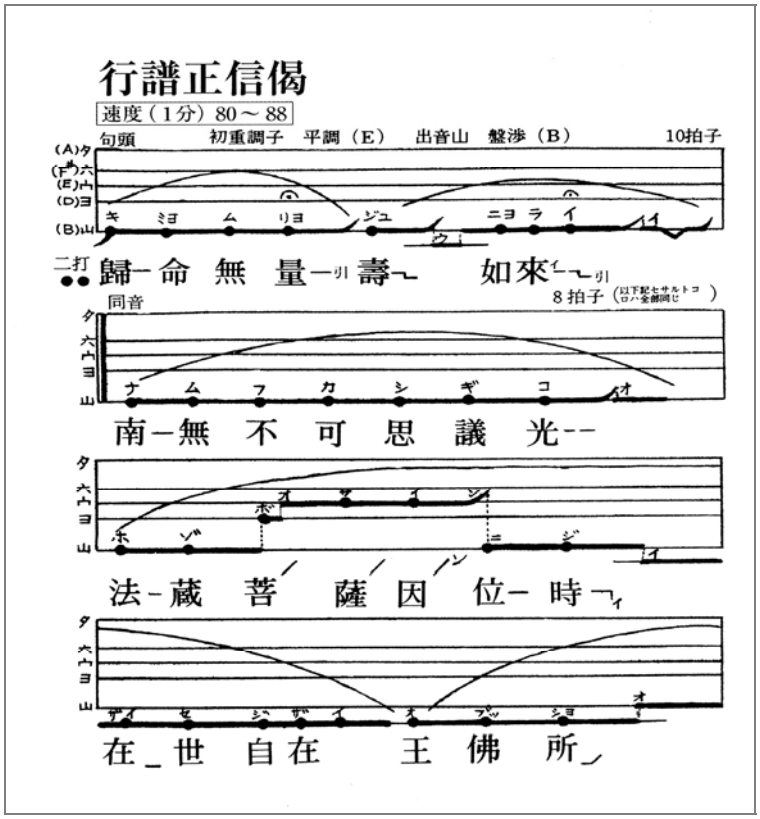
従来、「正信偈」などの声明は口伝によって後世に伝授されてきた。声明には、いわゆる楽譜に相当する、「博士(はかせ)」[20]と呼ばれる記号があり、現在用いられている「正信偈」のテキストにも、それらが併記される場合が多い。資料 2 で示した各「正信偈」のテキストにも、各派で用いられている「博士」が記されている。しかし、これらの「博士」は、現代の概念でいう楽譜とは異なり、あくまでも参考として記入されているものであり、音高や音価[21]を厳密に表現したものではない。また、少なくとも現代においては、これらの博

士を「読譜」すること自体が一般的ではなく、「正信偈」に親しもうとする人たちが「正信偈」のテキストを見たとしても、具体的に旋律をイメージすることは非常に困難であろう。

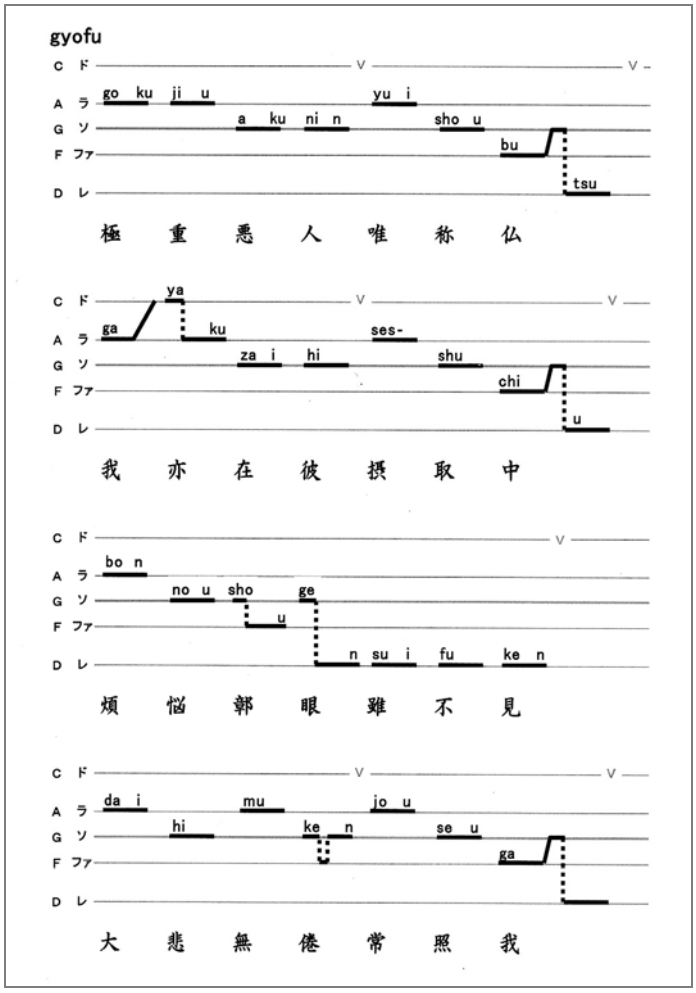
こうした観点から、派によっては、博士に頼らない方法で旋律を表現している場合もある。例えば、佛光寺派では、五線に音高や音価を表現した独自の記譜法を採用している(資料 3)。また、本願寺派でも英文の『勤行聖典』では、独自の五線を利用した表現が採られている(資料 4)。

声明は口伝によって継承されるものであるため、「正信偈」の旋律もまた同様に、優れた指導者による直接の指導によって習得するのが本来であろう。しかし一方で、宗教教育における学習や、一般門徒が家庭での勤行の練習を行う上では、より多くの人が親しめる方法で旋律を記述する必要もあると思われる。

資料 3 佛光寺派で用いられている、五線に音価・音高などを記した独自の記譜法による、「正信偈」経本の冒頭部分。[22]



資料 4　本願寺派の英語版『勤行聖典』に掲載された、独自の五線による旋律の表現。[23]

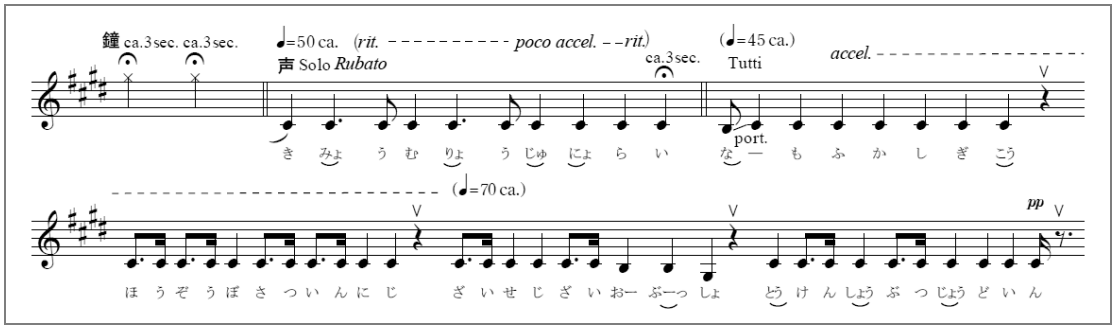


このため、筆者らは「正信偈」の音源を収集するだけでなく、それらの旋律を、現在最も一般的に用いられている記譜法にもとづいて五線譜に採譜した。採譜を行ったのは、筆者の一人である赤羽である。採譜にあたっては、収集された音源を可能な限り忠実に五線譜上に記譜するように心がけた。また、必ずしも楽譜を読むことに慣れていない人たちでも容易に読譜できるような楽譜となるように配慮した。

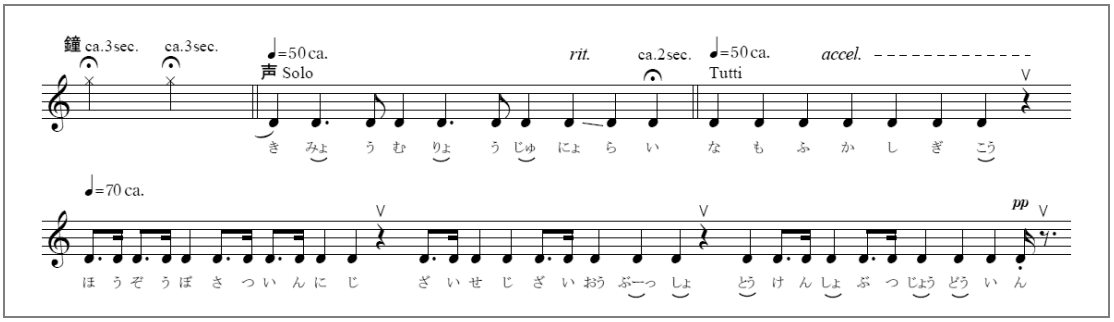
さらに、こうして採譜された旋律の楽譜に対し、より客観的な妥当性を持たせるため、現代音楽の専門家である、国立音楽大学の井上郷子准教授の校閲を受けた。また、本願寺派の楽譜については同派勤式（ごんしき）指導所の堤楽祐主任、木辺派については同派式務部の藤本秀暁部長・大幡義融副部長の校閲も受けた。今後、他３派についても、各派の声明の専門家に校閲を依頼する予定である。

以上の工程を経た上で得られた楽譜の一部を資料５に示す。

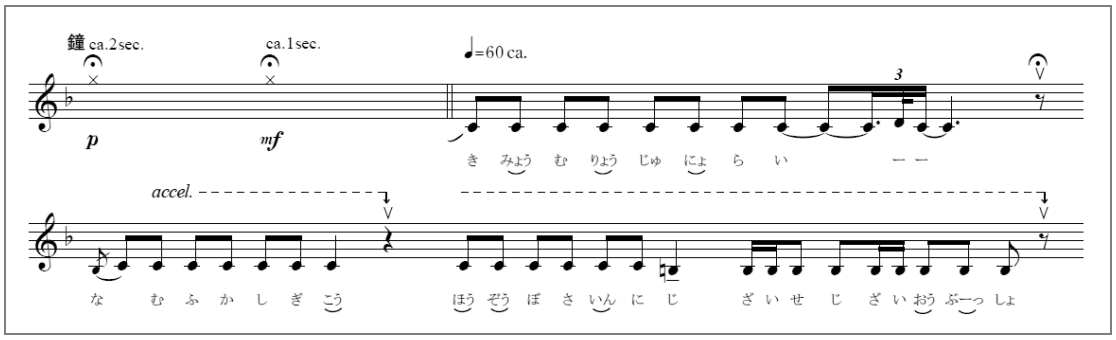
資料 5　本研究で作成した、5 派の「正信偈」の楽譜（冒頭部分）。本願寺派と木辺派は 2 種の旋律、大谷派・佛光寺派・興正派は 1 種の旋律を楽譜化した。木辺派の楽譜（真引・中引）は同派による校閲を受けたものであり、木辺派以外は、校閲前の状態である。



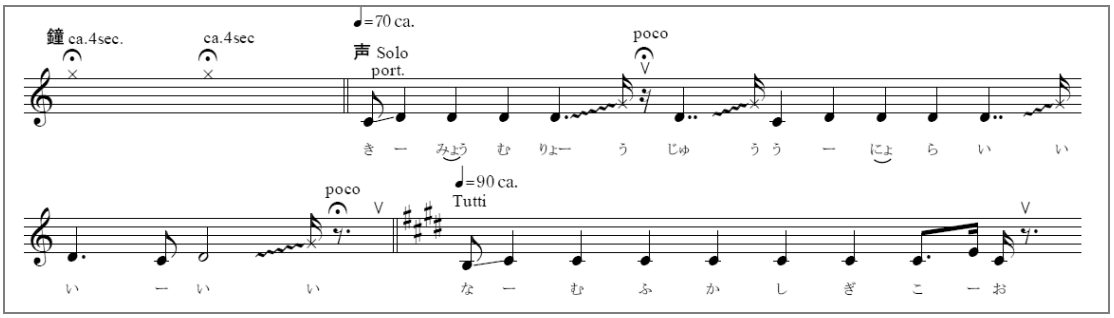
本願寺派（草譜）



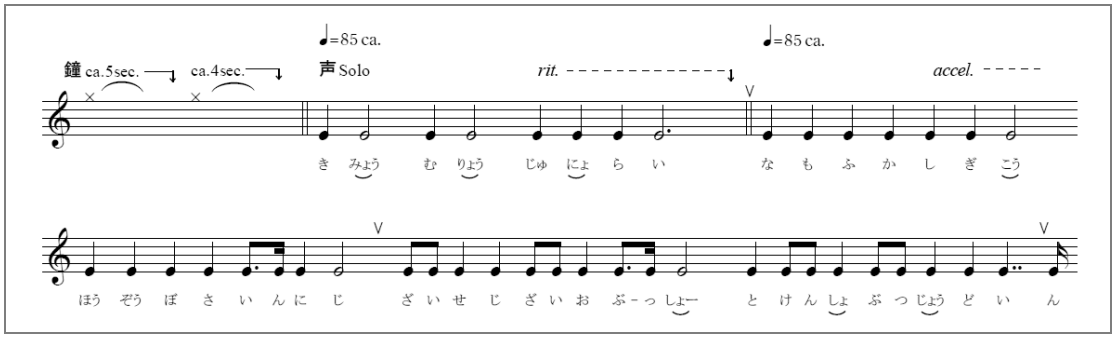
本願寺派（行譜）



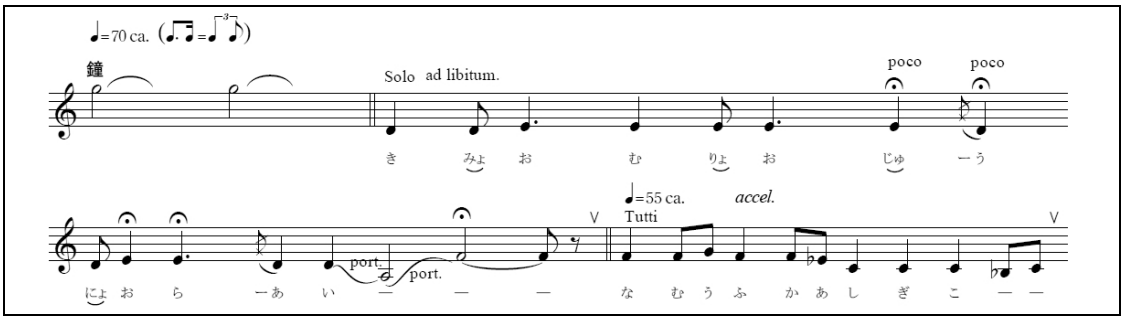
大谷派（草四句目下）



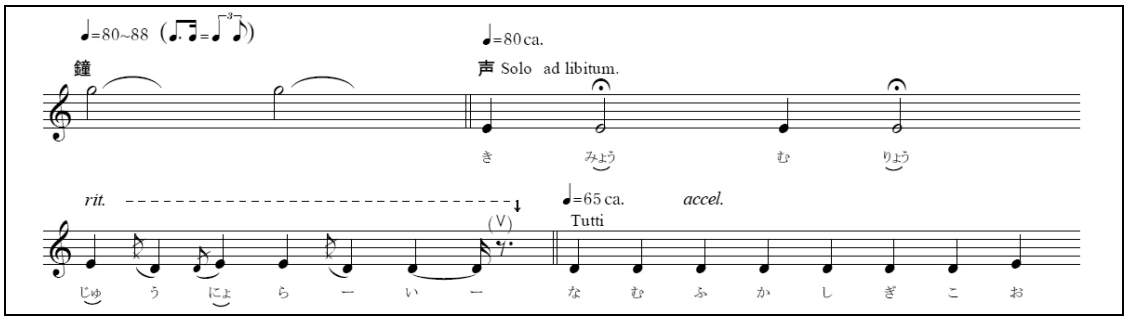
佛光寺派(行譜)



興正派(中拍子)



木辺派(真引)



木辺派(中引)

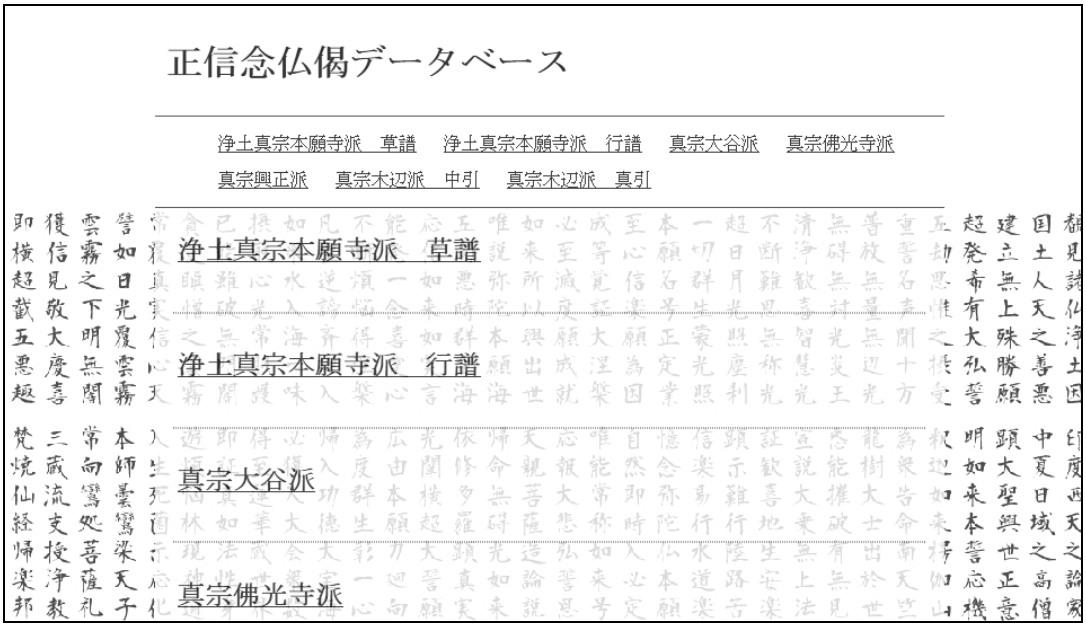
なお、「正信偈」の旋律を本研究で行ったように楽譜化する手法は過去にも例があるが、音楽の専門家の手を経ずに楽譜化されたものであったり、「正信偈」の一部分だけが楽譜化されたものであったりする

など、必ずしも「正信偈」の旋律を可能な限り完全に表現したものではなかった。また、楽譜の多くは各派の内部資料として作成されたものであり、一般的にアクセスできないものである。

V.「正信偈」データベースの作成

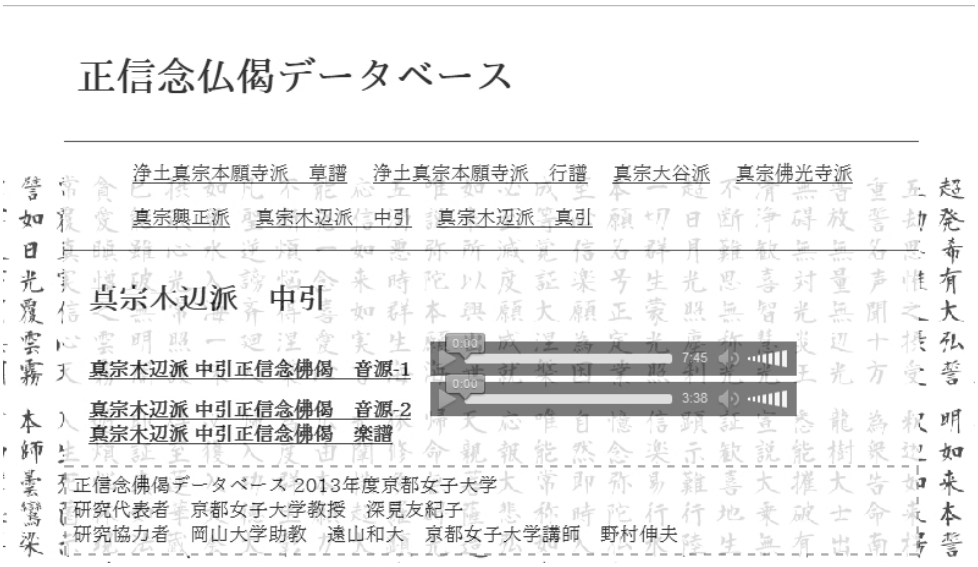
各派において収集した「正信偈」の音声と、それらを採譜した楽譜を、データベースとしてインターネット上で公開できるよう、「正信念仏偈データベース」として web コンテンツの作成を行った（資料 6）。

資料 6 「正信念仏偈データベース」の表紙。



現在までに調査を行った、5 派の計 7 つの旋律ごとに web 頁を作成し、各頁内では音声ファイルの聴取と楽譜の閲覧が可能になっている（資料 7）。

資料 7 「正信念仏偈データベース」の旋律ごとの頁の例（木辺派中引）。各頁内では、ストリーミング方式による音声ファイルの聴取と、PDF 形式による楽譜ファイルの閲覧が可能になっている。



音声に関しては、著作権の関係上ダウンロードができないよう、ストリーミング方式による配信を行う計画である。本願寺派と木辺派からは CD の音声を公開する許諾を得ており、他の 3 派については公開の許諾を受けられるように調整を行っているところである。

現在のところ、この web コンテンツは一般には公開されていないが、条件が整い次第、京都女子大学のサーバー上で公開される予定であり、その際には「正信偈 e-ラーニング教材」として活用することが可能となる。

なお、2014 年度に調査を行う 5 派（高田派・出雲路派・誠照寺派・三門徒派・山元派）についても、同様の web 頁を整備し、コンテンツに追加することになっている。

VI. まとめ

本願寺派・大谷派・佛光寺派・興正派・木辺派の 5 派において、日常的に多く用いられている「正信偈」の旋律を収集することができた。このことにより、ほぼこれまで各派に所属する僧侶や門徒の間でのみ知られてきた、各派の「正信偈」の旋律が明らかとなった。また、それらの旋律を、現在最も一般的に用いられている記譜法により楽譜化することで、「正信偈」の学習を行う上で容易に親しめる参考資料を作成することができたといえよう。

こうして得られた音声および楽譜は、多くの人にアクセスできるよう web コンテンツとして公開する予定であり、浄土真宗系学校における宗教教育の教材、一般門徒の勤行の練習用教材、他派「正信偈」の旋律に関心を持つ浄土真宗の僧侶の方々の参考資料など、多岐にわたる e-Learning 教材として活用されることが期待される。

また、各派「正信偈」の旋律の差異が、どのような背景を持つものなのか、今後の研究によって明らかにされることが望まれる。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、各派本山の担当者の皆様には、インタビューおよび資料の収集にご協力をいただいた。京都女子大学の黒田義道准教授には、「正信偈」について真宗学な観点からの有益なコメントを多くいただいた。また、京都女子大学元教授の野村伸夫氏には、「正信偈」に関する資料をお示しいただいた。ここに記して感謝の意を表する。

注

(1) 浄土真宗(真宗)系の仏教教派は多岐にわたるが、本稿では、真宗教団連合に所属する「真宗 10 派」について取り上げる。真宗 10 派とその本山は以下の通りである:

a) 浄土真宗本願寺派、本願寺(西本願寺; 京都市)

b) 真宗大谷派、真宗本廟(東本願寺; 京都市)

c) 真宗高田派、専修寺(せんじゅじ)(津市)

d) 真宗佛光寺派、佛光寺(京都市)

e) 真宗興正派、興正寺(京都市)

f) 真宗木辺派、錦織寺(野洲市)

g) 真宗出雲路派、毫摂寺(ごうしょうじ)(越前市)

h) 真宗誠照寺派、誠照寺(鯖江市)

i) 真宗三門徒派、専照寺(福井市)

j) 真宗山元派、 證誠寺(しょうじょうじ)(鯖江市)

⑵　浄土真宗では、信者のことを「門徒」と呼ぶ。

⑶　仏教における「偈文」は、多くの場合 4～7 文字からなり、仏などを讃える内容を持った韻文のことである。本稿で扱う「正信偈」も 偈文の一種である。

⑷　一般に「お経」と呼ばれる仏教の経典は、釈迦の死後に、弟子達が口伝によって伝えていた教えを文章化したものとされる。「正信偈」は親鸞の著作なので、厳密な意味では「お経」とは呼べないかも知れないが、ここでは、仏典一般を広く指す語として用いる。

⑸　「正信偈」の研究に関する文献は膨大な数にのぼるが、例えば以下のようなものが挙げられる。

a)　村上速水(1985)正信念仏偈讃述, 永田文昌堂, 209pp.

b)　重見一行(1981)教行信証の研究: その成立過程の文献的考察, 法蔵館, 480pp.

c)　福永静哉(1991)浄土真宗伝承唱読音概説―その歴史と現状, 永田文昌堂, 387pp.

⑹　一般には「教行信証(きょうぎょうしんしょう)」という略称で知られている。

⑺　「南無阿弥陀仏」(念仏)に旋律を付したものと、親鸞が詠んだ仏や先人の高僧などを讃える歌(和讃)に旋律を付したものを交互に読誦するもの。

⑻　勤行の最後に読誦される偈文。

⑼　真宗聖典編纂委員会(1985)浄土真宗聖典(原典版), 本願寺出版部, 253-260.

⑽「正信偈」のテキストは各派とも同一であるが、単語の発音には派によって微妙な違いが見られる。例えば、「中夏日域之高僧」という句を例に挙げると、以下のような発音の違いがみられる。

a)　「ちゅうか　じちいき　し　こうそう」(本願寺派・大谷派・興正派・木辺派)

b)　「ちゅうか　にちいき　し　こうそう」(佛光寺派)

⑾親鸞の祥月命日(亡くなった月の命日)に合わせて行われる、浄土真宗において最も重視される法要。

⑿句淘(くゆり)・句切(くぎり)・真四句目下(しんしくめさげ)・行四句目下(ぎょうしくめさげ)・草四句目下(そうしくめさげ)・墨譜(ぼくふ)・中拍子(ちゅうびょうし)・真読(しんどく)・舌々(ぜぜ)。このうち、日常的に最も頻繁に用いられる旋律は「草四句目下」。

⒀真譜(しんぷ)・行譜(ぎょうふ)・草譜(そうふ)・舌々。このうち、日常的に多く用いられるものは「行譜」。

⒁真譜・墨譜・中拍子・舌々。このうち、日常的に多く用いられるものは「中拍子」。

⒂浄土真宗本願寺派日常勤行聖典編纂委員会編(2013)浄土真宗本願寺派　日常勤行聖典, 本

願寺出版社, 142pp

(16) 真宗大谷派宗務所本廟部編(2013)真宗大谷派勤行集, 真宗大谷派宗務所出版部, 129pp.

(17) 本山佛光寺編(2011)真宗佛光寺派常用聖典, 本山佛光寺, 107pp.

(18) 真宗興正派勤式指導研究所(2009)同朋聖典, 真宗興正派宗務所, 120pp.

(19) 勤式委員会編(2010)真宗木辺派平成新編勤式集, 真宗木辺派本山錦織寺, 161pp.

(20)「墨譜」とも呼ばれる。

(21) 音価は、音や休止の時間的な長さのこと。音高は、音の高さのこと。

(22) 本山佛光寺(2004)真宗佛光寺派門信徒用行譜正信偈六首引五線譜, 本山佛光寺・真宗佛光寺派, 48pp.

(23) Jodo Shinshu Hongwanji-ha(2013)Jodo Shinshu Service Book, Hongwanji International Center, 86pp.